

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 17 日現在

機関番号：11301
 研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22330240
 研究課題名（和文） 形成的アセスメントによる「如何に学ぶかの学習」のための評価枠組に関する実証的研究
 研究課題名（英文） Positive Study on Evaluative framework for “learning to learn” by formative assessment
 研究代表者
 有本 昌弘 (ARIMOTO MASAHIRO)
 東北大学・大学院教育学研究科・教授
 研究者番号：80193093

研究成果の概要（和文）：

learning to learn(L2L：学びの学習力)は、キー・コンピテンシーの中核とされ、PISA の分析報告書によると、形成的アセスメントによる指導がその獲得に有効性があると指摘されている。最終年度には、高校教員の日常の学習指導に注目し、学習指導の背景にある共通する内容に注目した。そこで、主体的な学習につながる指導方法の取組状況を質問紙調査による把握・分析を通して、「学びの学習力」に関する指導の特徴を捉え、今後の教育改革の一助とするものである。

研究成果の概要（英文）：

The core of key competencies is said to “learning to learn”. According to the analysis report of PISA, formative assessment is pointed out to be effective in order to master the learning to learn. We focus on the teaching methods of the Japanese high school teachers, which can provide few previous research. The authors investigate the current status of teaching methods in Japanese high school teachers by questionnaire survey based on Teaching and Learning Research Programme (TLRP) in the UK.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2011年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2012年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
年度			
総計	5,700,000	1,710,000	7,410,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：学びの学習力(L2L)、形成的アセスメント、PISA、小中学校教員、高校教員

1. 研究開始当初の背景

着想に至った経緯としては、1)国内において近年、教室での教師と児童生徒との間で、

本来希望のまなざしに向け対話に用いられるべき「評価」に関して、一種のからかい（例：「マイナス点をつけるぞ!？」などの

脅し)によっていじめが助長されていること、2) 形成的アセスメントと学習リーダーシップこそが、外圧やトップダウンを跳ね返し、教師をエンパワメントし、教職の高度専門職性を促進するように考えられること、3) 日本の社会文化風土が集団のまとまりを重視する点において東アジア諸国よりもむしろ北欧と価値観が似ており、またここ数年連続で国際競争力第1位のフィンランドの秘訣を知りたかったこと、4) 英国の研究者が引用している (James et al 2007)、フィンランドでの研究『『如何に学ぶかの学習』をアセスする』において、その定義に、「意欲や希望という展望」といった態度を含めた上で (有本 2008)、その国家的な大規模調査プロジェクト [小学校6年 2891名 (1996)、中学校3年 2826名 (1997, 2002)、高等学校3年 3739名 (2000)] の実証的な調査内容と結果の詳細を是非把握し国内で試したいと考えたこと、5) すでに、フィンランドでは、学習リーダーシップから新たな学校自前または地元のリソースを掘り起こし汲み上げるべく、人的資本及び知識と技能をコネクトする社会関係資本に注目してきたこと (有本 2009) などがあつた。

そこで、わが国においても、形成的アセスメントの深い浸透が求められる。従来型の形成的評価は教師が意思決定の主体であつたのに対して、それは、児童生徒が調整・制御し、将来に向けた認知・観察・解釈する意味となり、学習を観察するプロセス、学習プロセスにおけるエピソードそのもの、リフレクションと進捗状況の自叙伝的理解の一部にまで概念を拡張した。さらに、背景にある主要能力 (キー・コンピテンシー) の究極の目標として「如何に学ぶかを学習する (ラーニング・トゥー・ラーン)」があげられる。この概念が一切の教科授業の基盤となるであろう。OECD では、教師のアセスメントリテラシーの立場を、形成的アセスメントに見出し、それを『質』向上の中核に位置すると考えている。国内では、学習指導面での形成的アセスメントと学校運営面での学習リーダーシップを切り離して論じられるが、本来は、学習のためのアセスメントを中軸に据えたより一層のあらゆるレベルでの改善こそが必要であり、それは、構成員の行動思考の動機づけの理解、さらに問題解決を可能にしその助けとなる事柄の関連性の理解につながり、授業・学校文化変容に資するものとなる。言い換えれば、これは、教師をエンパワーするものとなる。

2. 研究の目的

本研究は、「スクールベーストカリキュラム」を、形成的アセスメントと学習リーダーシップという2つの側面から、フィンラン

ド・英国で見られる拡張しつつある学習の概念を切り口にして掘り下げ、教師のアセスメントリテラシーの立場から、授業・学校文化変容に資する『質』理解に向けた努力としての評価」枠組を実証的に得ようとするものである。ここで用いているスクールベーストカリキュラム、形成的アセスメントと学習リーダーシップという術語は、欧州起源の概念であり、わが国には馴染みが少ない。しかし、これらは皆、PISA (OECD 生徒の学習到達度調査) をきっかけとして、わが国の教科教育の実践を俎上に載せる十分な意義を有している世界標準の術語である。今日、「教員の資質向上にカリキュラム開発が不可欠」であると考えられるが、次のような縛りや制約がある。1) 年々、外部からの学校評価と全国学力調査により成果主義による外圧が高まっていると懸念される。本来は、「スループット」が重要であるにもかかわらず、教員の職能発達の方向、フィードバックによる具体的方法が示されているとはいえない。2) さらに、確かに、教科書のない総合的な学習の時間により、裁量は増えたが、教科書を教える教科と二分されそれぞれを並置することは、裁量の余地を限定させてしまっていると考えられる。各教科、とりわけ国語、算数・数学でも知識を組み合わせ使うことが求められ、そこでクロスカリキュラーアプローチの要請があるにもかかわらず、授業・学校文化の壁、教科組織という壁がある。3) しかも、その教師のアセスメントリテラシーの土台と骨格をなす「教科教育」が、危機に直面している。なぜなら、知識基盤型社会への変化があり、先行きが不透明で、国や県レベルではマニュアル化できず、学校での指導計画が求められているからである。かといって、教職員間でそれら経験や勘の継承、知識の共有は困難で由々しき事態となっている。そのために研究代表者は、「スクールベーストカリキュラム開発 (SBCD)」という視点をとり入れ、25年間の学術研究の成果として博士論文にまとめている。しかしながら、依然として他のアジア諸国に比べ日本には馴染みが薄く「学校ぐるみ」という誤解された形で受け入れられ、概念に対する十分な理解が行き渡っていないことがある。そこで、海外での新たな動向を握る研究者とのパイプを生かすことにより、世界的に主流となっている「学習リーダーシップ」の基礎の上に、日本の教室と学校における教師の様子を観察し、教師のアセスメントリテラシーの立場から、教師の実践に対して意味あるフィードバックを提供するための、システムを提示する。

3. 研究の方法

英国とフィンランドにおいて行われている、各教科で「如何に学ぶかの学習」と、さ

らに近未来からみたカリキュラムの重要な概念であるサステナビリティ・アントレプレナーシップ、に関する優れた「アセスメント」についてレビューし、背景にある社会文化的アプローチによる方法論と集約された研究知見の国際的な交流の繰り返しの中で、日本の小中高の学校での類似した経験からデータを収集し、東アジアの中での日本の経験を付き合わせ比較により練り上げることにより、日本の学校における自前の評価枠組を実証的に得る。

4. 研究成果

EARLI2012のアセスメントとエヴァリュエーションの会議で、事例を教室から学校を超えたところにまで拡張する実践を、ウェンガーの「学びの共同体」の3つの概念から掬い上げることにより、抽象化し、発表した。また、院生の1人は、教室レベルでのフィードバックを実証的な組上に載せて、ICME2012において発表し、Jeremy Hodgen (Research in Mathematics Education 編集長)に投稿を示唆された。2009年の国際会議でのアセスメントの定義では、「生徒、教師それにピアによる日常実践の一部であり、進行中の学びを高める意味で、対話や表出、観察からの情報を採し、それを反映し、それに応答する実践」とされている。しかし、残念なことに日本国内からの定義づけはまだなく、日本語で「把握する、予想する、気付く、見極める、見取る、見立てる、認める、言葉掛けを工夫する、働きかける、次の活動に見通しを持たせる、気付きを促すなど」どのように使われているかを調査し、日本の教室や学校それに地域からのベストプラクティスにより再定義することが残されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① Shinkawa and Arimoto、Research for Japanese-Like Competency and Assessment Through Challenges of Eager Schools for Sustainability after the Great Earthquake and Tsunami、*OIDA International Journal of Sustainable Development*、Vol. 3、No. 9、pp. 61-70、2012、査読有、URL：http://papers.ssrn.com/sol3/papers.cfm?abstract_id=2035591
- ② 有本昌弘・山本佐江・新川壮光、学びを創り出すアセスメントー教員養成におけるコアカリキュラムへの導入の必要性ー、『日本教科教育学会誌』、25(2)、69-78、2012、査読有

- ③ Arimoto、A Note to Examine the Possibility for Makiguchi Pedagogy to be able to Cover the Philosophy of *SBCD*、Soka education、5、1-26、2012、査読無
- ④ 富岡比呂子、教師の教育実践に関するピリープを測定するための日本語版 TALIS の開発：教師の自尊感情との関係を視野に入れたパイロット調査創大教育研究、創大教育研究-(21)、43-59、2012、査読無、URL：<http://hdl.handle.net/10911/3396>

[学会発表] (計7件)

- ① Arimoto、Reflection on lecture in Vietnam about curriculum and textbooks of science in Japan through the dialogue between John Dewey and Inazo Nitobe、Papers presented at IHPST News of the IHPST (Institute of History and Philosophy of Sciences)、2012 IHPST in Asia Conference held at Seoul National University (SNU)、2012年10月18日、Seoul、South Korea
- ② Arimoto and Looney、Linking a framework of formative assessment and evaluation for “learning to learn” to learning circles for transformational school leadership、Papers presented at Sixth biennial meeting of Earli Sig 1: Assessment and Evaluation、2012年8月28日、Brussels、Belgium
- ③ Shinkawa and Arimoto、Research for Japanese-Like Competency and Assessment Through Challenges of Eager Schools for Sustainability after the Great Earthquake and Tsunami OIDA、International Conference on Sustainable Development 2011. Conference Ontario International Development Agency、2011年11月7日、Putrajaya、Malaysia
- ④ Arimoto・Kariwala・Looney、Linking a framework of formative assessment for ‘learning to Learn’ to learning circles for transformational school leadership、WALS、2011年11月4日、東京
- ⑤ Terabayashi・Arimoto・Matumoto、Case Study of Pedagogical Leadership and the Cycle of ‘Self Study’ and ‘Group Study’ of Horikawa Elementary School、WALS 2011年11月4日、東京
- ⑥ Shinkawa and Arimoto、Redefining Zest for Living Through the Western Word of. Key Competencies-Background and challenges of Japanese High School、APERA、2010年11月24日、Kuala Lumpur、Malaysia
- ⑦ Arimoto and Terabayashi、“Pushed on schools” or “pulled from schools” in

Japan? - focused on assessment as the single stumbling block, APERA, 2010 年 11 月 24 日、Kuala Lumpur, Malaysia

[図書] (計 4 件)

- ①有本昌弘、『学習の本質 - 研究の活用から実践へ』、OECD 教育研究革新センター (著, 編集)、明石書店、2013、159-188 ページ
- ②有本昌弘、『知識の創造・普及・活用 - 学習社会のナレッジ・マネジメント』、OECD 教育研究革新センター (著, 編集)、明石書店 2012、419-458 ページ
- ③有本昌弘、「カリキュラムをめぐる振り子現象」「教育の課題と教育課程」『よくわかる教育学原論』、ミネルヴァ書房、2012、88-89・96-97 ページ
- ④白鳥信義・有本昌弘、『教師の意識を変える校内研修マニュアル』、学事出版、2010、3-6 ページ

[その他]

ホームページ等

<http://www.sed.tohoku.ac.jp/lab/deseva/~arimoto/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

有本 昌弘 (ARIMOTO MASAHIRO)
東北大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：80193093

(2) 研究分担者

富岡 比呂子 (TOMIOKA HIROKO)
創価大学・創価教育研究所・講師
研究者番号：60440236